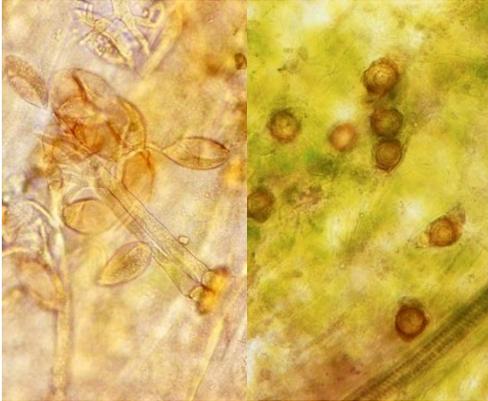


病害診断の現場から—卵菌類による病害—

診断依頼のあった事例を紹介します。本年は5～6月の多雨傾向により、べと病菌、ピシウム菌、疫病菌など、**卵菌類**による病害の発生が多くなっているという特徴がありました。



1. タマネギべと病：5月11日に持ち込まれました。発病適温は15℃前後であり、5月上旬の低温傾向により発病が広がったと考えられます。画像は分生子(左)と卵胞子(右)です。罹病組織内に形成される卵胞子は黄褐色に色づくため発見しやすいです。病徴画像がありませんが、実は軟腐病菌による二次腐敗が進行しており、べと病の病徴を留めていませんでした。しかし、べと病は絶対寄生菌であるため、分生子や卵胞子が確認できれば、べと病が主因と確定できます。



2. ブロッコリーの苗立枯れ：5月17日に持ち込まれました。地際のくびれ(左)から当初、リゾクトニア菌を疑いましたが、変色部にセロテープを押し当てて罹病組織を採取し顕微鏡観察すると、**ピシウム菌**の卵胞子が多数形成されていました(右)。圃場での発生状況(下)を見ると、立ち枯れが起きている手前の方で畝間に滞水が見られますが、滞水していない奥の方では青々と生育しているのが見えます。排水不良は大きな発病原因になります。



3. ナス根腐病：5月28日、萎凋症状のナスが持ち込まれました。根には所々に飴色の変色があり(左)、**ピシウム菌**の卵胞子が多数形成されていました(右)。



4. ナス根腐疫病：6月4日、萎凋症状のナスが持ち込まれました。根腐性の**疫病**では根の中心柱が赤褐変する特徴があります。褐変根を縦に切ると中心柱の変色が観察できます。

植物病原性の卵菌類は、菌糸生育適温が25～30℃の比較的高温域にあっても、遊走子形成は20℃以下の比較的低温で旺盛になることがあり、5月上旬の低温で遊走子形成と感染が促進され、その後の高温で病徴進展が促進された可能性が考えられます。